

瑩山禪師の生涯と思想的背景

大本山總持寺宝物殿館長 納富 常天

「瑩山禪師の生涯と思想的背景」という演題ですが、行実を掲げ、思想の形成過程を考察する事により、その思想的背景を追究したいと思えます。皆様のご期待に添えるか心もとないところですが、資料（P 31以下参照）に基づいてお話しいたします。資料（P 32）の能登半島の地図に、總持寺祖院の位置が記載されています。もともと總持寺はこの位置にありました。その下に永光寺（ようこうじ）があり、瑩山禪師の活躍拠点でした。永光寺は總持寺より以前に建立されています。その下の加賀の大乗寺は徹通義介が開きました。永平寺はその下にあります。また地図が切れた附近の永平寺の下に宝慶寺（ほうきょうじ）があります。

また資料（P 41・42）に禅宗略系図を掲げておきました。系図中央下に、今日の主題となる瑩山紹瑾があります。瑩山紹瑾から遡ると、徹通義介、孤雲懷辨、永平道元、天童如浄へとつながり、洞山良价、六祖慧能、菩提達磨に上ります。そして最後に釈迦牟尼仏があり、この釈迦牟尼仏から禅宗は展開したことがわかります。また中国からの来朝禅僧は四角で囲んでありますが、下に江戸時代に来朝した二派を付加しておきました。それから二重線は日本から中国へ渡り、禅を伝えた僧です。ご参考になさってください。

では本題に入ります。I、瑩山禪師の著書と伝記資料ですが、著書には『伝光録』『瑩山清規』『信心銘拈提』『坐禪用心記』『三根坐禪説』、そして『洞谷記』に所収されている「瑩山和尚語録」があります。

つぎに伝記資料ですが、自伝として『洞谷記』があり、宗内で成立したものはつぎのとおり二種あります。

開山行状記（『永光寺中興雜記』所収 寛永一九年〔一六四二〕久外嬭良編）

洞谷第一祖勅諡仏慈禪師瑩山和尚行実（『洞谷五祖行実』所収）

能州洞谷山永光寺瑩山紹瑾禪師（『日本洞上聯燈録』所収 享保一二年〔一七二七〕嶺南秀恕編）

永光瑾禪師伝（『月坡禪師語録』卷之二所収 天和二年〔一六八二〕）

總持寺開山仏慈禪師行実（自牛筆写本 貞享二年〔一六八五〕）

瑩峨行実集録（不伝式燈記 貞享五年〔一六八八〕）

諸嶽開山瑩山仏慈禪師行実（『諸嶽開山二祖禪師行録』通幻寂靈書 元禄四年〔一六九二〕刊）

總持寺瑩山瑾禪師伝（『日域洞上諸祖伝』 元禄六年〔一六九三〕湛元自澄撰）

能州諸嶽山總持開山瑩山紹瑾大和尚（『洞濟当門録』 元治二年〔一八六五〕隆暁編）

瑩山瑾禪師伝略考（『瑩山和尚伝光録』 安政四年〔一八五七〕仏州仙英）

二代瑩山紹瑾和尚（『大乘聯芳志』）

また宗外で成立したものはつぎのとおり三種があります。

總持寺瑩山瑾禪師伝（『扶桑禪林僧宝伝』 延宝三年〔一六七五〕高泉性激編）

永平徹通義介禪師法嗣能州諸嶽山總持寺瑩山紹瑾世姓藤氏（『延宝伝燈録』延宝六年〔一六七八〕卍元師蛮編）

能州諸嶽山總持寺沙門紹瑾伝（『本朝高僧伝』 元禄一五年〔一七〇二〕卍元師蛮編）

つぎにⅡ、瑩山禪師および總持寺に関する主な参考文献ですが、著書として、瑩山禪師関係はつぎのように二一件あります。

常濟大師全集 總持寺

日本曹洞宗兩祖伝 孤峰智燦

瑩山禪師御遺墨集 瑩山禪師奉讚刊行会編

瑩山禪（一）（二） 光地英学・松田文雄・新井勝龍

瑩山 佐橋法龍

瑩山禪師の研究 東隆真

瑩山禪師清規 東隆真

太祖瑩山禪師 東隆真

道元禪師と瑩山禪師 東隆真

城満寺 心と緑の森・創造の会

瑩山紹瑾の生涯 百瀬明治

また總持寺関係の参考文献は、六件があります。

嶽山史論 栗山泰音

總持寺史 栗山泰音

總持寺誌 總持寺

總持寺の歴史 竹内道雄

能登總持寺物語 佃和雄

曹洞宗教団の形成とその発展

〔總持寺の五院体制を視点にして 中嶋仁道〕

論文は「曹洞宗関係文献目録一・二」(当該項目)が出ております。以上、これらが基礎的資料となります。

道元禪師と比較すると、著書の量がずいぶん少ないですが、道元禪師には、『正法眼蔵(九十五卷)』『普勸坐禪儀』『永平広録』『永平清規』『永平元禪師語録』など膨大な著書があります。また伝記も瑩山禪師の『伝光録』にも収録されているので、宗内で成立したものだけでも約二〇種、宗外のものでも瑩山禪師在世中に成立した『元亨釈書』にも道元禪師が入っているので当然多くなります。参考文献でも同様に道元禪師は大変多く、瑩山禪師の文献が少ないのは仕方ないでしょう。

この傾向は他の宗派でも同じです。天台宗、真言宗など最澄、空海などの宗祖に関する研究は多いです。鎌倉新仏教でも法然、親鸞、日蓮、栄西、一遍らの研究は盛んです。しかし、瑩山禪師もさることながら、教団を發展させた天台宗の円仁・円珍、真言宗の覚鑿、あるいは浄土宗の第三祖然阿良忠、浄土真宗では八代目の蓮如、時宗二代目他阿真教、日蓮宗の六老僧(日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持)などの研究は活発でないのが現状です。それだけに瑩山禪師の今後の研究が待たれるところであり、その余地も充分あります。

つぎにⅢ、瑩山紹瑾(以下尊称省略)の生涯ですが、瑩山は文永五年(一一二六八)、越前多弥村に生まれました。

ところが、多弥村には、武生の帆山町と坂井郡の丸岡町の二箇所が当てられており、いずれにも決定的な根拠がなく、決着がついていません。建治元年（一二七五）、八歳のときに永平寺に上り、徹通義介について出家しましたが、若年時は癩癩持ちだったと伝記は伝えています。なお徹通義介につきましても、瑩山思想形成、あるいは人間形成に大きな影響を与えていますから、あとで改めて考えてみたいと思います。弘安三年（一二八〇）、永平寺第二代孤雲懷奘の末期の弟子になると、『洞谷記』は記しています。末期の弟子というのですが、孤雲懷奘が弘安三年八月二十四日に亡くなっているので、逆算して文永五年が瑩山の出生年だとされています。しかし、他のいくつかの資料によると、文永元年説のほうが説得力がありそうな気がします。いずれにせよ、出生時期は今後の問題点で、早急に解決する必要があります。

十八歳で、遍参の途に登ります。遍参先は寂円、東山湛照、白雲慧暁、無本覚心の膝下です。まず寂円（一二〇七〜一二九九）は、永平寺近隣の宝慶寺で住職をしていましたが、もとは天童如浄会下で道元と一緒に修行した間柄でした。道元を慕って安貞二年（一二三九）、あるいは二年に中国から来朝したといわれています。道元に二十年随従し、宇治の興聖寺・越前永平寺の承陽庵（如浄の墓）の塔主、つまり墓守の役職をしていました。道元が亡くなると、宋朝禪に回帰したと思われれます。道元は宋朝禪を批判し、唐朝禪に憧れたようで、慕古といわれる所以です。しかし、寂円には著書がなくその思想は明確ではありませんが、弟子で永平寺中興とされる五世義雲の語録を通して推察するしか方法がありません。それによりますと、宋朝禪の機関（指導法）に関する説示（洞山三路、宏智四借、臨濟四賓主、洞山五位）が取り入れられており、宋朝禪を受容していることがわかります。

次に東山湛照（一二三一〜一二九一）、白雲慧暁（一二三三〜一二九七）の二人は東福寺・円爾弁円の弟子です。二代目、四代目の東福寺住職をしています。東山湛照の弟子虎関師鍊が『元亨釈書』を書いています。体系的な

僧伝としては最初といってよいでしょう。しかし、もっと古くは、『延暦僧録』という僧伝がありますが、わずかに逸文で残っているだけです。

東山湛照・白雲慧暁の師円爾弁円（一一二〇二～一一二八〇）は、中国・徑山で無準師範（一一七八～一二四九）の弟子となり、印可を受け法嗣となりますが、『聖一国師語録』『坐禅論』『大日経見聞』『瑜祇経見聞』などを著しています。『大日経』や『瑜祇経』は密教の重要な經典です。禅と密教が、同時に円爾弁円の思想として並存していたようです。禅・天台・真言をあわせ修行するもので、兼修禅とここではいっておきます。「東福寺条々事」によりますと、「住持は円爾門徒中から器量人を計り代々譲与すべし」とあり、十方住持（後述）を原則とする五山であるにもかかわらず、結局、檀越九条家の意志もあり、住職は円爾の弟子にするべく「一流相承」ということで決めています。

また無本覚心（一一二〇七～一二九八）は、高野山伝法院の覚仏に密教を教わり、金剛三昧院の退耕行勇（一一六三～一二四一）に禅を習いました。退耕行勇は栄西（一一四一～一二二五）の弟子であり、この時期だけが高野山上に禅が行われていました。無本は道元に菩薩戒を受け、栄朝、藏叟朗誉、天祐思順（入宋僧）に従い修行しました。その後無本覚心は円爾弁円の紹介状をもって無準師範を訪ねますが、すでに没してしまいましたので、やむなく『無門関』（公案集）の著者・無門慧開（一一八三～一二六〇）の下で修行をしています。

無本覚心の著書は『法燈国師坐禅論』『法燈国師法語』などがありますが、『法語』に「諸法中禅門最勝、仏心宗なるが故、諸行中坐禅最勝、大安樂の行なるが故に」といっています。これは非常に注目すべきです。無本覚心の伝記が『本朝高僧伝』巻二〇にあります。そのなかに「真正の禅者、若し密法を修せば、其の応に影響あらん」とありますが、それは要するに、正しい禅僧が密教を修行したならば、感応道交に影響するであろうということです。

また、「今金剛乘（密教）を学ぶ者の、其の本を知らずして、卻つて禪を謗る」といつています。東寺の優れた学僧に、頼宝、杲宝、賢宝の三宝がいました。その杲宝（二三〇六〜一三六二）が真言宗の要義を述べ、禪と密教を対論した『開心抄』を著し、そのなかの「禪密対弁」で禪を批判しておりますが、これに対し逆批判をしています。

また無本は粉河寺（現在は粉河観音宗の本山）の子院である誓度院において、誓度院規式（全八条）を制しています。そのなかに、「三時勤行」（朝・昼・晩三回の勤行）、「四時坐禅」（午後八時、午前二時、前十時、午後四時、四回の坐禅）、「真言行法」（千手法、不動法、愛染法）が書かれています。「三時勤行」「四時坐禅」は現在でも禅寺で行われていますが、誓度院規式では「三時勤行」にも真言を誦することになっていました。

このような修行をして、瑩山は十九歳で宝慶寺の寂円の下に帰ります。一年間なので、その成果のほどはわかりませんが、多くの事を見聞覚知したことは間違いありません。そして、宝慶寺の維那に付いています。寺務抜群だったこともさることながら、遍参の成果が評価されたものと思います。正応二年（一二八九）二十二歳で「聞声悟道」したと、『洞谷記』にあります。具体的にはわかりません。わずかに触れている『日本洞上聯燈録』によりますと、『法華経』第十九法師功德品の「父母所生眼悉見三千界」を誦読している時に、はたと悟りを開いたと書いてありますが、本当にはわかりません。

悟道の機縁に二つあります。一つは「聞声悟道」です。中国の香巖智閑（？〜八九八）が修行に修行を重ねますが、なかなか悟りが得られません。ある日、掃除中に石ころを掃いたところ、竹に当たりました。その音で悟りを開いた、ということを行います。これを「香巖撃竹」といつて有名です。もう一つは「見色明心」です。「聞声悟道」が耳を機縁にしたのに対し、眼を機縁にしたのが「見色明心」です。唐の靈雲志勤の一見桃花が有名ですが、桃の花を見て悟りを開いたというのがあります。

二十五歳で、観音の如く、大悲闡提の弘誓願を発すとありますが、観音菩薩のように大悲の誓を立て、すべての衆生を救済しようと決心しています。二十六歳、義介に従い加賀大乘寺に移っています。大乘寺は弘長元年（一二六一）富樫家尚により、その菩提寺として建立され、その一族は有力な檀越でした。永仁元年（一二九三）には修行のよりどころとなる法堂の建立に尽力しています。二十八歳、『洞谷記』によりまずと阿波城万寺（徳島県海部郡海部町川西）の住持になっています。その経緯は海部に在任する大乘寺壇越の富樫一族が招請したとされています。資料が少なくあくまで推量の域を出ません。しかし『阿波国古文書』のなかに「坪内氏系図」があり、それに「姓藤原 富樫氏 後改前野 又改坪内」とあるばかりか、系図中に家尚もありますから、従来いわれていたことは間違いないかも知れません。ついでにあえて推量を加えますと、前に無本覚心の下に修行に行つたと述べましたが、その興国寺のあつた由良と海部は海上交通でかなり近い位置にあります。それであるいは興国寺にいるときに、人脈もさることながら地縁関係で城万寺に招請されたのではとひそかに私は考えています。

永仁四年（一二九六）二十九歳で、永平寺第四代義演（？～一三二四）に受戒作法を許可されています。それは「仏祖正伝菩薩戒作法」でした。そして眼可鉄鏡など五人に授戒したとあり、また永仁六年（一二九八）まで七〇余人に授戒した、と『洞谷記』に記されています。

正安元年（一二九九）三十二歳のとき、師命を奉じて海部から大乘寺へ帰錫し、義介から嗣法を受けて、大乘寺の半座（住持の代理をつとめる職。首座）になっています。そして義介から「なんじ、超師（師より優れていること）の気概あり。よろしく永平の宗旨を興すべし」と励まされています。三十三歳、『伝光録』（二巻五十三章）を著していますが、それには釈迦からの禅の伝燈を記し、懷井まで書かれています。

乾元元年（一三〇二）、三十五歳で義介について大乘寺の住持となり、『信心銘拈提』一卷を著しています。これ

は達磨から三代目の鑑智僧璨（?～六〇六）が著した本に批評を加えたものです。なお大乘寺会下の学徒は、数多あったと思われませんが、眼可鉄鏡（?～一三三二）、明峰素哲（一二七七～一三五〇）、峨山韶碩（一二七六～一三六六）、無涯智洪（?～一三五二）、恭翁運良（一二六七～一三四二）が有名です。正和二年（一二三三）四十六歳、洞谷山永光寺を開き、住持となります。現在でも立派な伽藍が残っています。鹿島郡酒井保（羽咋市中川町）地頭酒匂頼親嫡女とその夫・海野三郎滋野信直が酒井保の山を寄進しましたので、山中に茅屋を結びますが、これが永光寺のはじまりです。この年以降に、『坐禪用心記』『三根坐禪説』を著しています。文保元年（一二二七）五〇歳、それまで大乘寺と永光寺の両寺を往来していましたが、大乘寺を退院し永光寺に本拠を移しています。永光寺の山号は洞谷山といいますが、洞山良价（八〇七～八六九）の家風を慕い、山を谷にしたもので、永光は大陽警玄（九四二～一〇二七）の太陽ニ光に基づいているとされています。

文保二年（一二三二）五十一歳のときに、浄住寺（石川郡山崎庄）を開創し、元亨三年（一二三三）二月、弟子の無涯智洪を住持にしています。また翌五十二歳のときには、光孝寺を開創して、弟子の壺庵至簡（?～一二四二）に住持をさせています。なお九月八日に頂相（總持寺藏、重要文化財）に自賛していますが、九月十五日には羅漢供を始むと『洞谷記』にあります。道元も、宝治二年（一二四九）ころ『羅漢供養講式文』一卷を著していますが、それから七〇年後に瑩山は始めたこととなります。これは『瑩山清規』の「月中行事」の一つとして規定し、それ以降毎月一日・十五日の行事として羅漢供（応供諷經）を行っております。

つぎに重要文化財に指定されている「洞谷山尽未来際置文」ですが、「洞谷山置文」ともいわれるものを作成しています。これは非常に重要で、資料（P36）に写真を載せておきました。これには注目すべき二つのことが書かれています。一つ目は、「当山（永光寺）の住持は五老の塔主なり。瑩山の門徒中、嗣法の次第を守りて、住持興

行すべし」というものです。住職は自分の弟子でなくてはならない。また嗣法の順序を守って住職をし、かつ興行するようにと述べていることは、注目すべきことです。

禅林の住持制については、中国以来伝統的に二種類あります。官寺と私寺の二種類です。官寺は五山叢林といわれるもので、住持は十方住持（甲乙住持）制で、門派にかかわりなく、天下の名僧を招聘する制度です。自分の弟子や一門の弟子を住持にするのではなく、四方八方、十方から優秀な人を呼ぶという制度です。

ただし、東福寺だけは五山であるにも拘わらず、檀越が九条道家ということもあり、前に述べました「東福寺条々事」（P12）により円爾弁円の門流による一流相承でした。また東福寺では、円爾のあと一二八〇年に東山湛照、一二八一年に無関普門、一二九二年に白雲慧暁、一二九五年に山叟慧雲、一三〇〇年に蔵山順空、一三〇五年に無為昭元、一三〇六年に月船琛海、一三二一年に癡兀大慧などいずれも円爾の弟子がつぎつぎに住持をつとめ、無関普門を除き、長くて五年、短いと東山湛照の一夏九旬（九十日）という住持期間でした。もうひとつが、私寺ですが叢林下あるいは林下といえます。これは一流相承制あるいは度弟（つち）院制とも呼んでいますが、同一門派による住持独占の制度です。このようななかで、瑩山は「門徒中嗣法の次第を守り、住持興行すべし」と規定しています。あるいは東福寺の事情なども参考にしたかも知れません。

さらに二つ目は、「仏のたまわく、篤信の檀越、これを得る時は、仏法断絶せず云々と。また云く、檀那を敬うこと仏のごとくすべし。戒定慧解皆檀那の力によって成就す云々と。然る間、瑩山今生の仏法修行は、この檀越の信心によって成就す。（中略）この故に師檀和合して、親しく水魚の昵をなし、来際一如にして、骨肉の思いを致すべし。（中略）たとい難値難遇の事ありとも必ず和合和睦の思を生ずべし」とあります。これは檀家を重視するということにほかなりません。これが曹洞宗における教団発展の原動力になったことは間違いないありません。

この檀家の重視については、まず道元の『永平清規』中の「衆寮箴規」（衆寮内における威儀進退について述べたもの）に「相互に慈愛し、自他顧憐して、潜かに難値難遇の想いあらば必ず和合和睦の顔をみん」とあり、その表現が類似した部分がありますが、つぎに「知事清規」（岩波文庫 p167）監院の項に「増一阿含第三に云く（中略）檀越施主を恭敬すること父母に孝順して之を養ひ、之に侍するが如くすべし。施主は能く戒定慧を成じ、饒益する所多し。三宝の中において聖礙する所なし。能く四事を施すが故に、諸の比丘当に檀越に慈悲あるべし」とあります。

このように檀越施主を恭敬すること、父母に恭順し、父母を養い、これに侍するが如くすべしとあるのを、瑩山は旦那を敬うこと仏のごとくすべしとしています。また道元は『増一阿含経』をひき、檀越に慈心あるべしとしているのに対し、瑩山は師檀和合、水魚の昵、あるいは骨肉の思いを持っていなければならないとしています。これらのことから、瑩山は道元を思想を継承すると同時に、表現のうえで、より語感を強くし、増広していることがわかります。

また道元は『増一阿含経』を引き、施主は四事（修行僧の日常必要な四種のもの、飲食・衣服・臥具・湯薬）を施すから、恭敬し、慈心をもつて対応するよう示していますが、一方『正法眼蔵随聞記』のなかでは、「学道の人、衣糧を煩うなかれ。只仏制を守て世事を営むこと莫れ」あるいは「学仏道の人にはおのづから施主の供養あり」とあり、説く対象や場所、あるいは監院という立場によって多少異なることは留意する必要があります。しかしいずれにしても檀家の重視について述べていることは間違いありません。

徹通義介編『御遺言記録』（建長五年へ一二五三）四月七日から八月六日にわたる道元との対話の手記）のなか
に、「但し、国土安穩の間、檀那定んで安穩なるべし。檀那安穩ならば寺中必ず安穩なるべし」とあります。これ

は国土が安穩ならば、必ず檀那も寺院も安穩であるとして、国土と檀那と寺院の関係について述べたものですが、これは護国思想と民衆救済に直結していると思います。

『洞谷記』に「最勝殿に中尊釈迦牟尼仏（宝冠釈迦Ⅱ毘盧舎那仏）左脇士觀世音菩薩 右脇士虚空蔵菩薩を安置す。仏殿を最勝殿と称す。最勝王経説時は觀音・虚空蔵これ脇士となすなり」とあります。このように中尊が釈迦如来（宝冠釈迦）で觀音菩薩と虚空蔵菩薩を脇士とするのは、東大寺と全く同じです。

東大寺毘盧舎那仏の脇士について『東大寺要録』卷一に「左方觀自在菩薩、右辺虚空蔵高士」とあります。東大寺は金光明四天王護国之寺で、王法・佛法、不離一体の護国思想などによって、東大寺毘盧舎那仏の三尊が安置されております。永光寺も永光護国禪寺と呼ばれておりますから、思想的基盤は同じであるということができます。

道元の護国思想については『正法眼蔵』「行持」に「仏祖行持の功德、もとより人天を濟度する巨益あり」とあります。また『宝慶記』のなかに、「仏祖の坐禪と謂ふは初発心より、一切の諸の佛法を集めむことを願ふ故に、坐禪の中に於て、衆生を忘れず、衆生を捨てず、乃至昆虫にも慈念を給して、誓つて濟度せむことを願ひ、有らゆる功德を一切に廻向す」とあります。このように坐禪の實踐が衆生濟度であり、衆生濟度の究極が国家の救済、それは護国であると独自の主張をしています。瑩山の『坐禪用心記』にも、「常に大慈大悲に住して、坐禪無量の功德、一切衆生に回向せよ」とありますから、道元を単に繼承するのみならず、仏殿を最勝殿と呼称する伽藍結構、さらには東大寺と同じ様式の釈迦三尊を安置するなど、形として具現する独自の発想には注目する必要があるでしょう。

それから元亨元年（一一三二）五十四歳のときに、諸嶽山總持寺を創建しています。その切っ掛けは永光寺で總持寺開堂の瑞夢を感じたことによると『觀音堂縁起』にあります。『觀音堂縁起』は總持寺の開創に関する由来を

書いたものです。重要文化財になっています。それによりますと定賢権律師が鳳至郡櫛比庄（輪島市門前町）にある諸岳観音堂および寺領敷地を寄進したのが總持寺のはじまりです。定賢は三密（秘密の身・口・意の三業）の修法にすぐれた行者でした。

元亨二年には、後醍醐天皇から綸旨を賜っています。それには「日域無双の禪苑たるに依り、曹洞出世の道場に補任す。宜しく南禅第一の上利に相並び、紫衣の法服を著して、宝祚の延長を祈り奉るべし」とあります。この曹洞出世の道場に補任するということが非常に重要です。

元亨三年（一三二三）五十六歳のときに、永光寺に伝燈院・五老峰を完成しています。五老峰については、前に触れました「洞谷山尽未来際置文」に「当山（永光寺）の住持は五老の塔主」とありますように、前から意図していたと思われますが、これには如浄語録・道元霊骨・懷辨血経・義介嗣書・紹瑾嗣書などを納め建立したものです。永平下に投じた義介以下の達磨宗の嗣承は臨濟宗と曹洞宗にわたるので、天童如浄に結びつけ、一元化するという大きな意味がありました。もちろん、『伝光録』も正伝の仏法の伝燈を示して、その一元化を考えて著したのも思われます。資料（P 40）Ⅵ. 日本達磨宗の系譜を見てください。大慧宗杲（一〇八九～一一六三）の弟子拙庵徳光（一一二一～一二〇三）、大日房能忍（生没年未詳）、覺晏、懷鑑（覺禪）、懷辨、義介・義尹・義演・義準・義荐・義運と載せておきました。日本達磨宗の始祖大日房能忍は、榮西から修行もせず、戒律も護持せず、偃臥しているだけと激しく非難されています。しかし日蓮（一二三二～一二八二）は『開目鈔』の中で、法然と大日は、念仏宗と禅宗を興行しているとして、高く評価しています。しかし懷鑑が拠点にした波著寺は何処にあったかその場所が特定できていません。ただ、台密小川流の法匠忍辱房承澄（一二〇五～一二八二）が、天台密教の修法作法や、図像を収録した『阿婆縛鈔』の「延曆寺灌頂」奥書に、文永八年（一二七一）正月二十四日に「越州波寄元応

寺において旅糧書き了ぬ」とあり、地名の波寄に「なみつぎ」と振り仮名され、元応寺と寺名があります。また『本朝高僧伝』にも波著寺の波著に「なつき」と振仮名がありますから、波著寺は波著（なみつぎ）にある寺の意で、寺名は元応寺だろうと考えています。

私が三十余年勤めていました金沢文庫でも、隣接して称名寺がありますが、聖教の奥書や古文書に、しばしば地名の金沢を冠した金沢寺が使われています。また鎌倉の松谷にあるところから松谷寺と通称していますが、本当の寺名は正法（宝）藏寺です。これと同じように波が寄せる所にあったから、波著寺と通称していたと思いますが、本当の寺名は元応寺だろうと強く思っています。

翌五十七歳のときに、總持寺住持職を峨山韶碩にゆずり、明峰素哲を伴い永光寺に帰住しています。その讓状に瑩山は、「峨山老は予と三十年の同宿なり。（中略）宗風一興、法輪を転ぜんことを」と指示しています。また、同年一般には『瑩山清規』と呼ばれている『能州洞谷山永光禪寺行事次序』を著しています。この清規については尾崎先生が専門ですが、内容は日中・月中・年中の各行事に大別し、朝々夜、一日々晦日、正月々十二月までの諸行事を具体的に書いて示したものです。そのなかには、読経、念誦、祈禱など教化的要素も含まれています。このような『瑩山清規』は『禪苑清規』『備用清規』、宋朝禪林の規矩、『永平清規』、天童の家風、永平の古儀、懷昇・義介・建仁僧正（榮西）の行儀、永平寺・大乘寺の諸行儀などを受容して著していますが、『永平清規』が精神的・個人的・出世間的であるのに対し、『瑩山清規』は形式的（現実的）・集团的・対世間的とされています。また、『永平寺三祖行業記』の「三祖介禪師章」には、「時の風俗に随い、現規と折中すること尤も大用なり」とあり、時代や、世代の移り変わりに従い、現在行われている規矩と折中することが大きな効用であるとしているばかりか、『四節（結夏・解夏・冬至・年朝の日）の礼儀、初後の更点、粥罷諷經、掛搭の儀式等の礼法は悉く師（義介）の

調行せる所なり」とありますように、義介の、時代に即応した進歩的・積極的宗風を瑩山は継承し、自らの体験もふまえた宗教的立場が曹洞宗における教団形成の大きな要因であったことはいうまでもありません。また永光寺会下の学徒は壺庵至簡、珍山源照、黙譜祖忍尼、金燈慧球尼、明照円観尼、孤峰覚明（一二七一―一三六一）らがありました。

正中二年（一二三五）、五十八歳のとき、『洞谷記』によりますと両願を立てています。「一願は菩提心を生（今生に発し、（中略）身命を顧みず生々世々本願の如く護持すべし。一願は今生悲母懷観大姉最後遺言において、領納発願し、是亦女流済度の菩薩なり」ですが、これは生々世々化度利生し、等正覚に至る本願とともに、女人救済という願を立てていることは非常に重要です。また同年八月十五日に、「自耕自作閑田地、幾度売来買去新、無限靈苗種熟脱、法堂上見挿鋤人」の遺偈を遺し入滅していますが、『洞谷記』の「山僧遺跡寺寺置文記」に（一）洞谷山（永光寺）五老の遺跡（二）円通院（洞谷山内）（三）宝応寺 悲母恵観大姉の為建立（四）光孝寺能登最初の独住所（五）放生寺 加州第三の僧所（六）浄住寺 加州第二の遺跡（七）大乘寺 先師開法加州第一の貴寺 永平一・二・三代靈骨安置の所（八）總持寺 能登第三の僧所とあり、瑩山における遺跡として、当時は洞谷山永光寺が筆頭で、總持寺は光孝寺について能登第三の僧所であったことは留意する必要があります。

それでは最初に述べましたように、改めて徹通義介について考えてみたいと思います。はじめに、徹通義介の伝記資料ですが、（一）宗内で成立した伝記として、『御遺言記録』『永平寺三祖行業記』『元祖孤雲徹通三大尊行状記』『日域曹洞列祖行業記』『日域洞上諸祖伝』『日本洞上聯燈録』『大乘聯芳志』などがあります。ただ、『御遺言記録』は義介の編著といった方がいかも知れません。

また、（二）宗外で成立した伝記は、『扶桑禪林僧宝伝』『延宝伝燈録』『本朝高僧伝』があります。

つぎに徹通義介の生涯について考えてみます。義介は承久元年（一二一九）越前国丹生郡北足羽郷に生まれています。寛喜三年（一二三一）十三歳のときに、波著寺懷鑑（別名覺禪）について出家し、義鑑と安名（命名）されています。十四歳で叡山に登り、円戒をうけ、天台学を研究しています。その後波著寺に帰り、懷鑑から浄土三部経や、『首楞嚴經』なども学んだといわれています。仁治二年（一二四一）二十三歳のときに、懷鑑と共に深草興聖寺の道元に参じていますが、寛元元年（一二四三）二十五歳のとき、道元の北越入山に従っています。永平寺ではその力量を認められ、典座をつとめました。典座は食事を作る役職で、大変重要です。それは修業者の修業するための食事を作るからです。

道元が修行のために登った比叡山では、その出身により階級的に学生と堂衆に分かれていました。道元は高級貴族の出身ですから学生でした。下級階級出身のものは堂衆で、雑役をつとめる下級僧です。食事の用意や掃除、香花を供えることなど、学生の修行や学問研究などを支えるものでした。そのような環境で修行をしていましたから、典座が如何に重要な役職であるか知らないで中国に行きました。そこで阿育王山の典座からあなたはまだ弁道の何たるかを知らないねと、一撃を食らいましたが、これは致しかたのないことでした。

また宝治元年（一二四七）二十九歳のときには、道元の鎌倉行化の前に、監寺職にあてられています。それは義介が寺の運営・管理に抜群の能力があったからでしょうが、「昼は衆事を弁營し、夜は禅坐旦に達す」とありますように、昼はさまざまなことを捌いて、夜は明方まで坐禅をして励んでいました。建長三年（一二五一）三十三歳のときに、懷鑑から仏照（拙庵徳光）下の印書と菩薩大戒儀軌を受けています。これが先ほどの日本達磨宗の四世になったということになります。またこれが後で、義演や寂円から批判されることとなりますし、瑩山が五老峰を築造することになったと思います。建長五年（一二五三）三十五歳のときに、『御遺言記録』によりますと、義介

は「随分に道念あるも老婆心あらず」。さらには「備世間・出世に於て、其の志気あるを知る。唯未だ老婆心あらず」と注意されていますが、前後三回にわたり、老婆心の欠如を指摘されています。切れ者だったのでしょいか。つぎに、注目しなければならぬのは、道元から八斎戒印板を賜わっていることです。八斎戒は、在家が出家生活に一步近づくと意義をもち、出家者と在家をつなぐ有力な方法です。在家が出家者に準じて月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三〇日の六斎日に八斎戒（不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒・不得脂粉塗身・不得歌舞唱伎及往觀聽・不得上高広大床）を保つことになります。このような八斎戒を刷って授けていたということになります。あるいは参集した道俗の教化に励んでいた興聖寺時代を中心としたものかも知れません。道（出家者）に対しては『学道用心集』や『正法眼蔵随聞記』を説示し、俗人に対しては八斎戒の護持を強調された証しかと思われます。またこれは『三木一草事』に「開山永平（和尚有別願）授戒殆將及千人。然而正伝戒法〔才五人〕也」とあり、千人におよぶ人に授戒したとあるものとも、深く関連することは確かです。また『伝光録』の「永平元和尚章」に、「永平寺にして竜神来りて八斎戒を請し、日々回向に預からんと願ひ出で見ゆ。これによりて日々八斎戒をかき、回向せらる。」とありますので、永平寺時代にも民衆教化につとめていたと考えなければなりません。これらにつきましても今後さらに研究する必要があります。なおこのような八斎戒印板を懐妊にではなく、義介に授与されたということは、とりわけ民衆の教化を義介に託してのことかと強く思われます。

またこれは出版文化史の上からも非常に重要なことです。因みにこの資料には掲げていませんが、日本における禅籍の開版は、大日房能忍による『瀧山警策』が最初とされていますが、總持寺も『碧巖録』を室町初期（応永三〇年 一四二三）に出版しています。巻首扉に「本朝能州捨持禅寺置焉」、巻二尾に「施主榮林總繁庵主」、巻三尾に「前總持承天大和尚奉報御恩也」とあります。それから、永平寺第六世曇希が、延文二年（一二五七）に『義雲

和尚語録』『永平初祖学道用心集』を、翌三年には『永平元禪師語録』を出版しています。その刊記によりますと、当時曇希は『住持永平兼宝慶比丘曇希』とありますように、永平寺と宝慶寺を兼務していましたから、あるいは永平寺で開板したかとも思われます。しかし施財者は「宝慶大檀越野州太守藤原朝臣知冬」とありますから、宝慶寺とも考えられますが、現物が残っておりませんので確認できません。

道元は八月六日療養のため上洛のみぎり、義介に対し、永平寺維持について遺言しました。義介は「尋常肝に銘じて忘れず」と答えています。八月二十八日に道元は入滅しています。建長七年（一二五五）三十七歳で、懷辨から嗣法を受けるとともに、『正法眼蔵』「嗣書」を書写・校合しています。懷辨（一一九八―一二八〇）は道元の会下に投じて以来、四十七年間常随し、道元の遺跡をつぎ、一切異ならず、信受奉行したとされています。『正法眼蔵』『永平広録』の編集に鋭意つとめると同時に、『光明蔵三昧』『正法眼蔵随聞記』を著しています。その懷辨から永平寺伽藍整備の委嘱をうけ、京都建仁寺・東福寺、鎌倉寿福寺・建長寺などを調査しています。その当時の永平寺は、『三祖行業記』によりますと、「土木未だ備わらず、堂閣わずか両三」とあります。その両三は法堂・僧堂・庫院でした。礼拝の対象である本尊を安置する仏殿はありませんでした。『百丈清規』の中核をなす『禪門規式』には、仏殿はありません。それから考えると、唐時代の禪林における伽藍結構は法堂を建て、仏殿は建てない習慣であったようです。したがって、法堂・僧堂・庫院からなる永平寺の伽藍結構は、道元が唐朝禪を慕われた表れではないでしょうか。「慕古」という有名な言葉がありますが、その慕古にほかなりません。しかし宋朝禪林では、仏殿を設けることが一般的でした。

『三祖行業記』によりますと、「諸方の叢林・宋朝の風俗、就中先師（道元）の道を伝えし天童山の規矩、及び大刹叢林の現規を記録し来りて、当山（永平寺）の叢席を一興すべし。宛も是れ先師の恩に報ゆる者なり。（中略）

加之、祖翁榮西僧正の素意なり。然れども叢林の微細なる規矩と、禪家諸師の語録以下一切の聖教は、皆以て先年の興聖寺焼失の時、或は紛失す。本清規はこれ有りとも雖も、時の風俗に随い現規と折中すること尤も大用なり。諸方を遍参し、大国を歴観して、以て永平の宗旨を建立すべし」とあります。

興聖寺の焼失はいつであったか明らかではありませんが、当時、道元は懸命に『正法眼蔵』の執筆に専念していた時期です。それを辿っていきますと、寛元元年（一二四三）五月と六月に空白期間があります。このときではないかと思われます。それは五月五日に「菩提薩埵四摂法」を著し、六月になくて、七月七日に興聖寺で「葛藤」を著しており、七月十六日ころには波多野義重の勧請により、興聖寺を詮慧にゆずり、越前にむけ出発しています。ですから、五月から六月の間に焼失したと思われます。しかし『三祖行業記』からうけるような、全面的焼失ではなかったようです。

正元元年（一二五九）四十一歳のときに、懷辨や義演、さらには義介自らも参加し、『正法眼蔵』の書写・校合に鋭意努めているとき、懷辨の指示により入宋しています。これはとりもなおさず『正法眼蔵』の書写活動に参加できなくなったこととなります。入宋後は径山・天童山など江南の諸禅刹を歴遊していますが、具体的には明らかではありません。弘長二年（一二六二）四十四歳で帰朝し、『五山十刹図』を将来するとともに、早速永平寺の堂塔を興すこととなります。

義介は道元の帰国入安貞元年（一二七〇）の三十五年後に帰国していますから、その間宋朝禅林も規矩や生活習慣において、大変に変容していたと私は推測しています。入宋の事情などについて道元と義介との比較は難しいですが、道元は正師を求めて正伝の仏法を体得するために渡海し、宋朝禅を批判して、唐朝禅への思慕ということが目的になったのですが、義介の場合には宋朝禅林の規矩の記録、さらには時の風俗に随い、現規と折中することが目的で

入宋しましたから、勢い宋朝禪の導入ということにならざるを得なかったと思います。また二十五年はいかにも長い時間です。空海・最澄の時代に思いを馳せてみますと、空海は長安において正統密教を研究しています。二〇年の修業・研究の予定でしたが、師恵果の指示と示寂により、二年で帰国しています。また最澄も帰国の遣唐船を待つ間に、密教を学んでいますが、空海の密教とは比較になりません。そこで最澄の弟子たちがこぞって空海に師事し、密教を研究しています。しかし、やがて叡山は円仁・円珍を長安に派遣し、正統密教を研究させることとなります。それは四〇年から五〇年ぐらい経過してからの渡海求法でした。

ところが、空海当時における密教の所依の經典は『大日経』と『金剛頂経』でした。しかし四〇年あるいは五〇年後に天台宗の円仁・円珍が、同じ長安に行き密教の研究をした時には、『大日経』・『金剛頂経』に加えて『蘇悉地羯羅経』も所依の經典として位置づけられていました。この『蘇悉地羯羅経』については、空海も知っていました。それは空海撰の『真言宗所学経律論目録』という目録があり、その律部に分類収録されています。したがいまして空海が知らなかったわけではありません。このように四〇年から五〇年でこれだけの違いがありますから、三十五年の年月でも相当に違いがあっても当然だと思います。

文永四年（一二六七）四十九歳で懷井のあとをうけ、永平寺第三代住持となっていますが、銳意教団の発展をはかり、さかんに伽藍などの整備を行っています。その実情については『永平寺三祖行業記』に、「山門を建て、兩廊を造り、三尊を安置し、祖師三尊・土地五軀悉くこれを作る。四節の礼儀、初後の更点、粥罷諷経、掛搭の儀式等の礼法は悉く師の調行する所なり（中略）永平の中興と謂うべし」とありますように、目覚ましい活躍をしています。このような義介の進歩的・積極的寺院運営に対し、義演（永平寺の書記、『永平広録』巻五・六・七の編集・『正法眼蔵』の書写にかかわっている）や寂円（隱逸的保守的）などがいろいろ批判しています。その根拠と

したものは『正法眼蔵随聞記』に「当世の人、多く造像起塔等の事を仏法興隆と思へり。是れ亦非なり。(中略)今ま僧堂を立んとて勸進をもし随分にいとなむ事は、必ずしも仏法興隆と思わず」とありますように、義介が進めた伽藍整備や三尊安置などに対し、真つ向から反対しています。それには義介が永平寺の典座や監寺などの要職を歴任し、さらには渡宋して、永平寺三世になるなど輝かしい経歴、あるいは日本達磨宗の嗣承や、性格的に老婆心の欠如などに対する、義演ら保守派の感情的反発もあつたでしょう。

やがて文永九年(一二七二)五十四歳のとき、永平寺を退院し、懷辨が永平寺の再住持に返り咲きます。それから弘安三年(一二八〇)六十二歳で義介は、永平寺に再住持することになります。それは懷辨が示寂したからです。しかし、保守派の寂円や義演らとの内紛は鎮静せず、遂に弘安十年(一二八七)六十九歳のとき、義介は永平寺を去ることになります。

この義介の退院については、『正法眼蔵』「重雲堂式」に「堂中の衆は乳水のごとくに和合して、たがひに道業を一興すべし」とあり、『吉祥山永平寺衆寮箴規』に「闔寮の清衆、各父母、兄弟、骨肉、師僧、善知識の念に住し、相互ひに慈愛し、自他顧憐して、潜在難値難遇の想有らば、必ず和合、和睦の顔を見ん」と、道元は重ねて誠めているにも拘わらず、このような事態になったことは、遺憾といわざるを得ません。

永仁元年(一二九三)七十五歳で、永平寺を離れ、大乘寺に移り、開堂しています。ただ、永平寺を退院するにあたり、道元親輯の七五巻本・十二巻本『正法眼蔵』を携行したことはいうまでもありません。そしてこれを瑩山、さらにはその会下に謄写され、やがて總持寺五院の輪住を介して北陸・東北地方に謄写伝播されることになります。それは永光寺に十二巻本があること、妙高庵や伝法庵に『正法眼蔵』があつたこと、さらには伝法庵の七十五巻本が、五院輪住を通じ出羽竜門寺・向川寺、奥州正法寺に謄写伝播していることからわかります。大乘寺は弘長元年

(一一二六) に富樫家尚が創建し、真言宗の澄海阿闍梨を住持に招きましたが、澄海は義介に帰依していましたから、義介を住持に招請したわけです。大乘寺に移ったときの義介の心情はどうだったでしょうか。『御遺言記録』に「当寺（永平寺）は勝地たるに依つて執思する処と雖も、それまた世に随い、時に随うべし。仏法いずれの地においても所行の勝地となすなり」といつております。義介が大乘寺に移つたというのも、随世、随時、所行の勝地と承知してのことであつたと考えられます。そのように考えますと、それぞれに異なつた事情があつたと思ひますが、義介を批判した寂円は宝慶寺、それから詮慧は京都の永興寺、義尹は肥後大慈寺、義準は宇治興聖寺とそれぞれの地を所行の勝地として、信念をもつて活躍したのではなからうかと考えています。『正法眼蔵随聞記』にも「只時にのぞみ、事に触て、興法の為利生の為に諸事を斟酌すべきなり」とあります。このように世に随い、時に随い、あるいは時にのぞみ、事に触れて、行ずる所を勝地と思ひ興法利生するよう示されていますから、義介はそれに従つたまでと考えています。

乾元元年（一一三〇）八十四歳で大乘寺を退院し、瑩山が大乘寺の住持に就任しますが、徳治元年（一一三〇）八十八歳で自賛の頂相を明峰素哲に与えています。そして延慶二年（一一三〇）九十一歳で「七転八倒 九十一年 蘆花帶雪 午夜月円」（『永平寺第三代大乘開山大和尚遷化喪事規記』によると、最初の二字を書き、後は瑩山に代筆させたと伝える）の遺偈を認め示寂しましたが、山内に開山塔定光院を建塔しています。

以上、瑩山の生涯と思想的背景について述べましたが、まず生涯の行実として、義介について出家し、懐辨の末期の弟子となり、義演に仏祖正伝菩薩戒作法を受け、義介に嗣法をうけています。また寂円、東山湛照、白雲慧暁、無本覚心に歴参し、城万寺、大乘寺、永光寺、總持寺に歴任するとともに、門弟（四門人六兄弟など）の育成にも努めています。

また能登に永光寺、円通院、光孝寺、總持寺、加賀に宝応寺、放生寺、浄住寺を建立し、弟子を住持にしています。それから「洞谷山尽未来際置文」を作成して、輪番住持制の基礎を築き、檀家を重視するように指示していますが、これが今日、一万五千といわれる寺院を擁する曹洞宗教団の形成に多大な影響を与えたことは申すまでもございません。江戸時代末期には約一万七千の曹洞宗寺院がありました。その約95%以上は總持寺の末寺で、永平寺末は一千にも満たない実情でした。そのことを考えますと、瑩山の輪番住持制の基礎の確立、さらには檀家の重視や女人救済は無視することはできません。

また思想的背景としては、義介を通じての、道元の正伝の仏法（只管打坐）を基本とするとともに、この正伝の仏法を形式化、具象化に努めています。それは『瑩山清規』における諸行事、あるいは道元の護国思想を、永光寺の伽藍結構や釈迦三尊で表すと同時に、思想の表現などにおいても、より、強調し増広しております。

また義介の時代に即応した進歩的・積極的宗風に多大な影響をうけるとともに、東山湛照・白雲慧暁・無本覚心の公案や密教、さらには俗信仰も含む祈禱的な要素も受容していますが、これはあくまでも民衆教化に対応するものであったと考えなければならぬと思います。

以上で講演を終わります。失礼いたしました。

質疑応答

質問 義介さんと瑩山禪師の関係は私も注目しています。先生のご指摘も失礼ないいかたですが適切だと思えます。達磨宗がめざしていたもの、特に達磨宗の影響を受けていた懷井さんとの関係と、瑩山禪師の関係をつなぐ

ものとして義介さんの位置づけをどのようにお考えですか。

納富 日本達磨宗をどう考えるかです。拙庵徳光から大日房能忍が達磨宗を伝来します。初めは大日房能忍は撰津

三宝寺を拠点にしましたが、弟子の覚晏が大和の多武峰を拠点に活躍し、懐鑑や懐辨などの俊才を育成しています。多武峰もとは興福寺の支配下にありましたが、途中で天台宗が入り、天台宗の末寺になっていました。そのような事情から、しばしば興福寺から襲撃を受けています。そのようなことから、多武峰から離散し、拠点を求めて波著寺と通称される元応寺へ移ったのではなからうかと考えています。そして、また拠点を求めて元応寺から道元の膝下へ行くのですが、道元の教えに洗脳されてしまい、達磨宗が正伝の仏法に併呑されてしまい、五老峰により一元化され消滅してしまったのではなからうか、と思っていますが、懐辨は道元の遺跡をつぎ、信受奉行したとされるに対し、義介は入宋し、最新の宋朝禅を伝え、進歩的積極的宗風でありましたから、瑩山の影響を与えたことは間違いないと思っています。

質問 宗風という側面からすると、そのときに達磨宗の教えは絶えてしまうのですか。

納富 そうです。少なくとも多武峰から通称波著寺へ展開したものは絶えてしまったと思います。しかし撰津三宝寺、さらには多武峰以外にも拠点を求めて進出したものもあるいはあったかと思いますが、現在のところ明らかではありません。

質問 儀礼式的には、残っていたのではないかと思いますが。道元禅師と違う点は。

納富 それは達磨宗ということではないと思います。中国の禅林で行われていた諸行事を取り入れたものではないかと思えます。また道元禅師は大慧宗杲を中心とする宋朝禅を批判し、唐朝禅を慕っていますが、達磨宗は宋朝禅によったものですから、宗風は異なります。

I. 瑩山禪師の著書と伝記資料

(1) 著書

伝光録、瑩山清規、信心銘拈提、坐禪用心記、三根坐禪説、瑩山和尚語録（洞谷記所収）

(2) 伝記資料

(ア) 自伝

洞谷記

(イ) 宗内で成立した伝記

開山行状記（『永光寺中興雜記』所収 寛永十九年（一六四二）久外嬭良編）

洞谷第一祖勅諭仏慈禪師瑩山和尚行実（『洞谷五祖行実』所収）

能州洞谷山永光寺瑩山紹瑾禪師（『日本洞上聯燈録』所収 享保十二年（一七二七）嶺南秀恕編）

永光瑾禪師伝（『月坡禪師語録』卷之二所収 天和二年（一六八二）

總持寺開山仏慈禪師行実（自牛筆写本 貞享二年（一六八五）

瑩峨行実集録（不伝式燈記 貞享五年（一六八八）

諸嶽開山瑩山仏慈禪師行実（『諸嶽開山二祖禪師行録』通幻寂靈書 元禄四年（一六九二）刊）

總持寺瑩山瑾禪師伝（『日域洞上諸祖伝』 元禄六年（一六九三）湛元自澄撰）

能州諸嶽山總持開山瑩山紹瑾大和尚（『洞濟当門録』 元治二年（一八六五）隆暁編）

瑩山瑾禪師伝略考（『瑩山和尚伝光録』 安政四年（一八五七）仏州仙英）

二代瑩山紹瑾和尚（『大乘聯芳志』）

(ウ) 宗外で成立した伝記

總持寺瑩山瑾禪師伝（『扶桑禪林僧宝伝』 延宝三年（一六七五）高泉性激編）

永平徹通義介禪師法嗣能州諸嶽山總持寺瑩山紹瑾世姓藤氏（『延宝伝燈録』延宝録年（一六七八）卍元師蛮編）

能州諸嶽山總持寺沙門紹瑾伝（『本朝高僧伝』 元禄十五年（一七〇二）卍元師蛮編）

II. 瑩山禪師および總持寺に関する主な参考文献

(1) 著書

(ア) 瑩山禪師関係

- 常濟大師全集 總持寺
- 日本曹洞宗両祖伝 孤峰智璨
- 瑩山禪師御遺墨集 瑩山禪師奉讚刊行会編
- 瑩山禪(一)〜十二 光地英学・松田文雄・新井勝龍

瑩山 佐橋法龍

瑩山禪師の研究 東隆真

瑩山禪師清規 東隆真

太祖瑩山禪師 東隆真

道元禪師と瑩山禪師 東隆真

城満寺 心と緑の森・創造の会

瑩山紹瑾の生涯 百瀬明治

(イ) 總持寺関係

嶽山史論 栗山泰音

總持寺史 栗山泰音

總持寺誌 總持寺

總持寺の歴史 竹内道雄

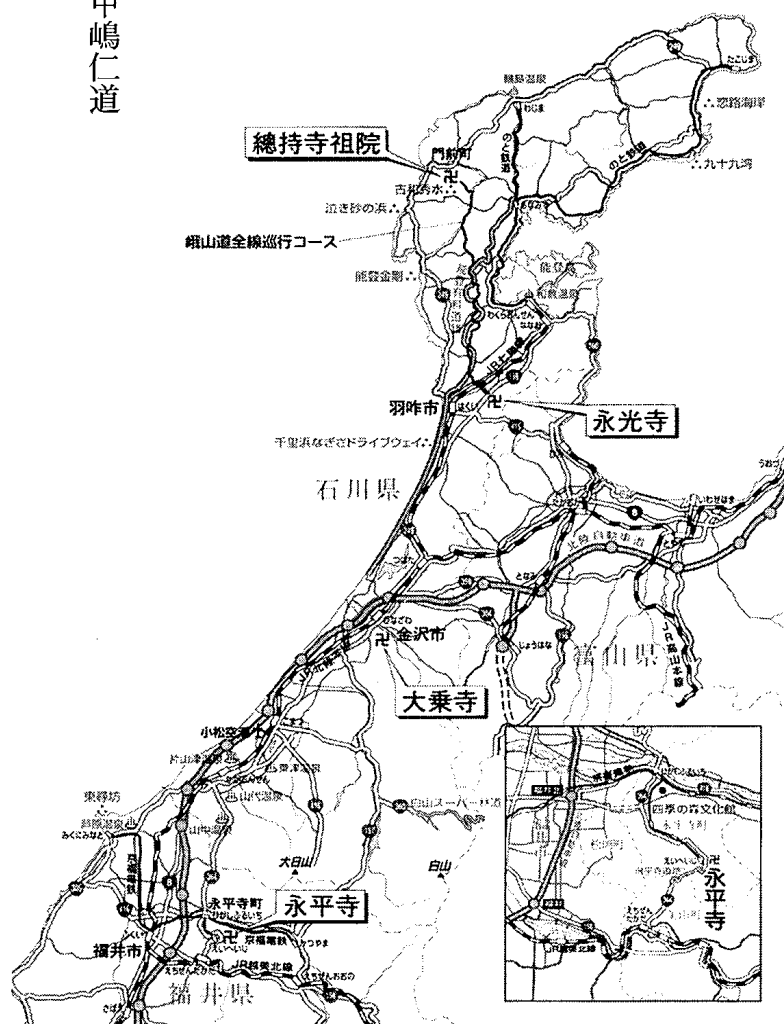
能登總持寺物語 佃和雄

曹洞宗教団の形成とその発展

→總持寺の五院体制を視点にして 中嶋仁道

(2) 論文

曹洞宗関係文献目録一・二一 当該項目



Ⅲ. 瑩山紹瑾（以下尊称省略）の生涯

文永	五年（一二六八）	1	越前多弥村（武生市帆山町・坂井郡丸岡町）に生まれる。幼名行生。
建治	元年（一二七五）	8	永平寺に登り徹通義介について出家。若年時、瞋恚人に過ぐ。（徹通Ⅱ文永四年〔一二六七〕永平寺住持）
弘安	三年（一二八〇）	13	永平寺第二代孤雲懷辨の末期の弟子となる。（『洞谷記』）
	八年（一二八五）	18	遍参の途に登る。（寂円・東山湛照・白雲慧暁・無本覚心）
	宝慶寺寂円（一二〇七）	二二九	道元を慕って来朝。
	東山湛照（一二三二）	二九二	道元に二十五年随従、興聖・永平寺の承陽庵（如浄祖塔）塔主、宋朝禪に回帰か。（義雲禪師語録）
	白雲慧暁（一二三三）	二九七	巴爾弁円の弟子 東福寺二世 三聖寺開山 弟子に虎関師鍊
	※巴爾弁円（一二〇二）	二八〇	無準師範の弟子 聖一国師語録 坐禅論 大日経見聞 瑜祇経見聞などを著す。禅・天台・真言の兼修禅 東福寺条々事 住持は巴爾門徒中から器量人を計り代々譲与すべし（一流相承）
	無本覚心（一二〇七）	二九八	高野山伝法院 覚仏に密教、金剛三昧院 退耕行勇に禅、道元に菩薩戒うく。荣朝、蔵叟朗誉、天祐 思順（入宋僧）に従う。
	巴爾弁円の紹介状をもち無準師範を訪ぬ。没後のため無門関（公案集）の著者無門慧開に参じ得法。		
	法燈国師坐禅論・法燈国師法語（諸法中禅門最勝、仏心宗なるが故、諸行中坐禅最勝、大安樂の行なるが故）を著す。		
	紀州鷲峰山興国寺沙門覚心伝（真正の禅者、若し密法を修せば、其の応に影響あらん。今金剛乘を学ぶ者の、其の本を知らずして、卻って禅を謗る。（本朝高僧伝卷二〇、大日本仏教全書 一〇二、二八九下）		
	誓度院（粉河寺） 規式（全八条） 三時勤行、四時坐禅、真言行法（千手・不動・愛染）		
正応	九年（一二八六）	19	宝慶寺維那（洞谷記）、寺務抜群。
	二年（一二八九）	22	聞声悟道（洞谷記）
	五年（一二九二）	25	観音の如く大悲闡提の弘誓願を発す。
永仁	元年（一二九三）	26	義介に従い加賀大乘寺に移る。大乘寺檀越 富樫氏。
	三年（一二九五）	28	阿波城万寺の住持となる。（洞谷記） 海部の富樫一族が招請。



重文 瑩山紹瑾禪師像
（大本山總持寺所蔵）

徳島県海部郡海部町川西。眼可鉄鏡など五人に授戒。(洞谷記)

四年(一二九六) 29 永平寺第四代義演(?〜一三二四)に受戒作法を許可される。(仏祖正伝菩薩戒作法)

永仁六年(一二九八)まで七〇余人に授戒。(洞谷記)

正安 元年(一二九九) 32 師命を奉じて海部から大乘寺帰錫。義介から嗣法をうけ大乘寺の半座となる。(洞谷記)

二年(一三〇〇) 33 『伝光録』を著す。(二卷五十三章)

乾元 元年(一三〇二) 35 大乘寺住持となる。この後『信心銘拈提』一卷を著す。

大乘寺会下の学徒 眼可鉄鏡(?〜一三三二) 明峰素哲(一二七七〜一三五〇)

峨山韶碩(一二七六〜一三六六) 無涯智洪(?〜一三五二)

恭翁運良(一二六七〜一三四一)

正和 二年(一三二三) 46 洞谷山永光寺を開き、住持となる。

鹿島郡酒井保(羽昨市中川町)地頭酒匂頼親嫡女とその夫海野三郎滋野信直が酒井保の山を寄進。山中に茅屋を結ぶ。

この年以降に『坐禅用心記』『三根坐禅説』を著す。

文保 元年(一三二七) 50 大乘寺を退院して永光寺に本拠を移す。

洞谷山永光寺 洞谷(洞山良价の家風)・永光(大陽警玄 大陽 光)に基づく。

二年(一三二八) 51 浄住寺(石川郡山崎庄)開創。元亨三年二月、無涯智洪住持。

元応 元年(一三二九) 52 光孝寺開創。壺庵至簡住持。頂相(總持寺藏、重要文化財)に自賛する。羅漢供始む。(洞谷記)

洞谷山置文(洞谷山尽未来際置文 重要文化財)を作成する。

当山(永光寺)の住持 五老の塔主、門徒中嗣法の次第を守り、住持興行すべし。

仏ののたまわく「篤信の檀越これを得る時は、仏法断絶せず云々」と。また云く「檀那を敬うこと仏のごとくすべし。戒定慧解みな檀那の力によって成就す云々」と。然る間、瑩山今生の仏法修行は、この檀越の信心によって成就す。(中略)この故に師檀和合して、親しく水魚の昵をなし、来際一如にして、骨肉の思いを致すべし。(中略)たとい難値難遇の事ありとも必ず和合和睦の思いを生ずべし。 檀家重視

※禅林の住持制

官寺 五山叢林 十方住持(甲乙住持)制 門派にかかわりなく天下の名僧を招聘する制度。

東福寺(檀越九条道家)のみは一流相承(前掲 東福寺条々事)

私寺—叢林下 一流相承(度弟院)制 同一門派による任持職独占の制度

※『知事清規』(道元禪師清規 岩波文庫本 一六七頁 原漢文)

増一阿含第三に云く(中略)檀越施主を恭敬すること父母に孝順して之を養ひ之に侍するが如くすべし。施主は能く戒定慧を成じ、饒益する所多し。三宝の中において聖擬する所なし。能く四事を施すが故に、諸の比丘当に檀越に慈心あるべし。

(大正新修大藏經、増一阿含經卷第四護心品第十 大正一・五六四・上、下所収)

※『御遺言記録』(永平室中聞書 建長五年 一二五二 七月八日条) 徹通義介編

但し国土安穩之間檀那定んで安穩なるべし。檀那安穩ならば寺中必ず安穩なるべし(曹洞宗全書 宗源 二五六頁上)

最勝殿に中尊釈迦牟尼仏(宝冠釈迦—毘盧舍那仏) 左脇土觀世音菩薩 右脇土虚空藏菩薩を安置す。仏殿を最勝殿と称す。

最勝王經説時は觀音・虚空藏これ脇土となすなり。(洞谷記)

※東大寺毘盧舍那仏の脇土について『東大寺要録』卷一に左方觀自在菩薩、右邊虚空藏高士。

東大寺—金光明四天王護国之寺 王法・仏法不離一体の護国思想

※『正法眼蔵』「行持」 仏祖行持の功德、もとより人天を濟度する巨益あり(岩波文庫本中 二十九頁)

『宝慶記』 仏祖の坐禪—坐禪の中に於て、衆生を忘れず、衆生を捨てず乃至蠅虫にも慈念を給して、誓つて濟度せむことを願ひ、有らゆる功德を一切に廻向す。(岩波文庫本 四十五頁)

『坐禪用心記』 常に大慈大悲に住して、坐禪無量の功德、一切衆生に回向せよ。

元亨 元年(一二三二) 54 諸嶽山總持寺創建。永光寺で總持寺開堂の瑞夢を感じる。(觀音堂縁起、重要文化財)

二年(一二三三) 55 後醍醐天皇綸旨—日域無双の禪苑たるに依り、曹洞出世の道場に補任す。宜しく南禪第一の上刹に相並び、紫衣の法服を著して、宝祚の延長を祈り奉るべし。

三年(一二三四) 56 永光寺に伝燈院・五老峰(如浄語録・道元靈骨・懷昇血経・義介嗣書・紹瑾嗣書)完成。

四年(一二三五) 57 永平下に投じた義介以下の達磨宗の嗣承は済洞にわたるので、天童如浄から一元化する。

四年(一二三四) 57 總持寺任持職を峨山韶碩にゆずり、明峰素哲を伴い永光寺に歸住。

「峨山老は予が三十年の同宿なり。(中略)宗風一興、法輪を転ぜんことを。」

『能州洞谷山永光禪寺行事次序』(瑩山清規)を著す。

日中・月中・年中の各行事に大別。朝々夜、一日々晦日、正月—十二月までの諸行事。読經、念誦、祈禱など教化的要素。

『禪苑清規』『備用清規』宋朝禪林の規矩、『永平清規』（典座教訓、弁道法、赴粥飯法、衆寮箴規、対大己五夏闍梨法、知事清規）、天童の家風、永平の古儀、懷葬・義介・建仁僧正の行儀、永平寺・大乘寺の諸行儀など受容。

※永平清規 精神的・個人的・出世間的

瑩山清規 形式的（現実的）・集団的・対世間的

『永平寺三祖行業記』（三祖介禪師章） 時の風俗に随い現規と折中すること尤も大用なり。（曹洞宗全書 史伝七・下）

四節（結夏・解夏・冬至・年朝の日）の礼儀、初後の更点、粥罷諷經、掛搭の儀式等の礼法は悉く師の調行せる所なり。

（曹洞宗全書 史伝八・上）

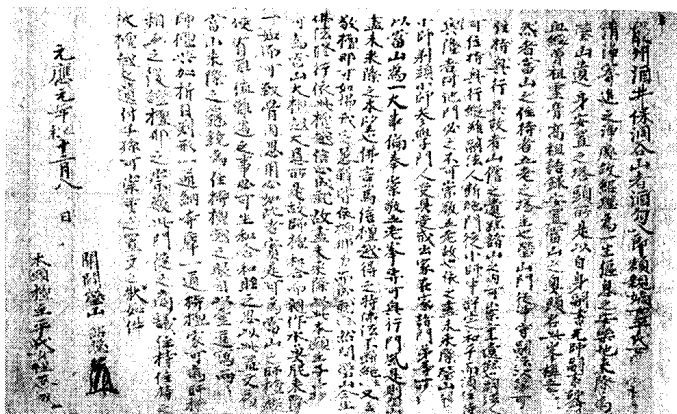
永光寺会下の学徒 壺庵至簡・珍山源照・默譜祖忍尼・金燈慧球尼・明照円觀尼・孤峰覚明（二二七一～一三六一）他

正中 二年（一三二五） 58 両願を發す。一願は菩提心を生（今）生に發し、（中略）身命を顧みず生々世々本願（生々世々化度利生し等正覺に至る）の如く護持すべし。一願は今生悲母懷觀大姉最後遺言において、領納發願し是亦女流濟度の菩薩なり。（洞谷記 正中二年五月二十三日）
入滅。（八月一日）

山僧遺跡寺寺置文記（洞谷記）

- (ア) 洞谷山（永光寺）五老の遺跡
- (イ) 円通院（洞谷山内）
- (ウ) 宝心寺 悲母恵觀大姉の為建立
- (エ) 光孝寺 能登最初の独住所
- (オ) 放生寺 加州第三の僧所
- (カ) 浄住寺 加州第二の遺跡
- (キ) 大乘寺 先師開法加州第一の貴寺
- (ク) 總持寺 永平一、二、三代靈骨安置の所
能登第三の僧所

IV. 徹通義介の伝承資料



洞谷山尽未来際置文（洞谷山永光寺所蔵）

(1) 宗内で成立した伝記

御遺言記録 (建長五年四月二十七日〜八月六日)
 永平寺三祖行業記 元祖孤雲徹通三大尊行状記
 日域曹洞列祖行業記 日域洞上諸祖伝
 日本洞上聯燈録 大乘聯芳志

(2) 宗外で成立した伝記

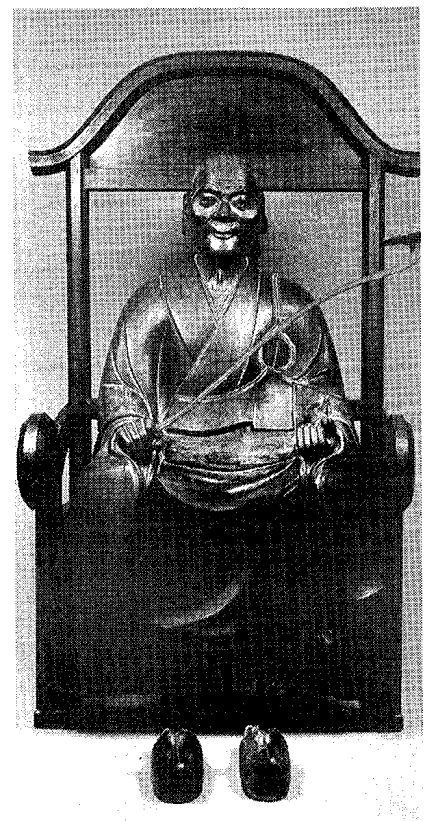
延宝伝燈録

本朝高僧伝

V. 徹通義介の生涯

承久	元年 (一一二九)	1	越前国丹生郡北足羽郷に生まれる。
寛喜	三年 (一一三一)	13	波著寺懷鑑(別名 覺禪)について出家。義鑑と安名される。
	四年 (一一三二)	14	叡山に登り円戒をうけ、天台学研究。
			離山後、懷鑑から浄土三部経、首楞嚴経なども学ぶ。
仁治	二年 (一一四一)	23	懷鑑と共に深草興聖寺の道元に参ず。
寛元	元年 (一一四三)	25	道元の北越入山に従い、永平寺で典座をつとむ。
宝治	元年 (一一四七)	29	永平寺監寺をつとむ。(昼は衆事を弁營し、夜は禅坐旦に達す)
建長	三年 (一一五二)	33	懷鑑から仏照(拙庵徳光)下の印書并菩薩大戒儀軌うく。
	五年 (一一五三)	35	随分に道念あるも老婆心あらず。(御遺言記録、七月八日、二十三日)

道元から八斎戒印板を賜わる。(御遺言記録、八月三日)
 道元療養のため上洛のみぎり、永平寺維持について遺言。(御遺言記録、八月六日) ※道元 八月二十八日入滅



木造徹通義介禪師坐像
 (洞谷山永光寺所蔵)

七年（二二五五） 37 懷辨（道元の遺跡をつぎ一切異ならず、信受奉行。『正法眼蔵』『永平広録』の編集、『光明蔵三昧』『正法

眼蔵隨聞記』を著す。）に嗣法うく。

懷辨から永平寺伽藍整備の委嘱をうけ、京都建仁寺・東福寺、鎌倉寿福寺・建長寺など調査。

※当時の永平寺Ⅱ土木未だ備わらず、堂閣わずか両三（法堂・僧堂・庫院）のみ。

（永平寺三祖行業記 初祖道元禪師章 曹洞宗全書史伝3・下）

※諸方の叢林・宋朝の風俗、就中先師（道元）の道を伝えし天童山の規矩、及び大刹叢林の現規を記録し来りて、当山（永平寺）の叢
席を一興すべし。宛も是れ先師の恩に報ゆる者なり。（中略）加之祖翁榮西僧正の素意なり。然れども叢林の微細なる規矩と、禪家
諸師の語録以下一切の聖教は皆以て先年の興聖寺焼失の時、或は紛失す。本清規はこれ有りと雖も時の風俗に随い現規と折中するこ
と尤も大用なり。諸方を遍参し、大國を歴観して以て永平の宗旨を建立すべし。

（永平寺三祖行業記 三祖介禪師章、曹洞宗全書史伝7・下）

正元 元年（二二五九） 41 入宋。径山・天童山など江南の諸禪刹を歴遊す。

弘長 二年（二二六二） 44 帰朝。『五山十刹図』を將來するとともに、永平寺の堂塔を興す。

（道元帰国八安貞元年 一二二七〇後三五年）

文永 四年（二二六七） 49 永平寺住持となる。教団の發展をはかり、伽藍などの整備を行う。

※山門を建て、両廊を造り、三尊を安置し、祖師三尊・土地五軀悉くこれを作る。四節の礼儀、初後の更点、粥罷諷經、掛搭の儀式等
の礼法は悉く師の調行する所なり（中略）永平の中興と謂うべし。（永平寺三祖行業記 三祖介禪師章、曹洞宗全書 史伝8・上）

進歩的寺院運営に対し義演（永平寺書記、永平広録八五、六、七〇編集、『正法眼蔵』書写） 寂円（隱逸的保守的）などが批判。

※当世の人、多く造像起塔等の事を仏法興隆と思へり。是れ亦非なり。（中略）今ま僧堂を立んとて勸進をもし随分になむ事は、必
ずしも仏法興隆と思わず。（正法眼蔵隨聞記第二 岩波文庫本 五〇頁）

九年（二二七二） 54 永平寺退院。懷辨永平寺再住持。

弘安 三年（二二八〇） 62 永平寺再住持。懷辨示寂（弘安三年）による。

一〇年（二二八七） 69 永平寺を去る。保守派（寂円・義演）との内紛による。

永仁 元年（二二九三） 75 大乘寺開堂。（弘長元年 一二六一 富樫家尚大乘寺創建、真言宗澄海阿闍梨を住持とす）

澄海、義介に帰依し住持に招請。

※当寺（永平寺）勝地たるに依つて執思する処と雖も、それまた世に随い、時に随うべし。仏法いづれの地においても、所行の勝地となすなり。（御遺言記録 曹洞宗全書 宗源 二五六頁上）

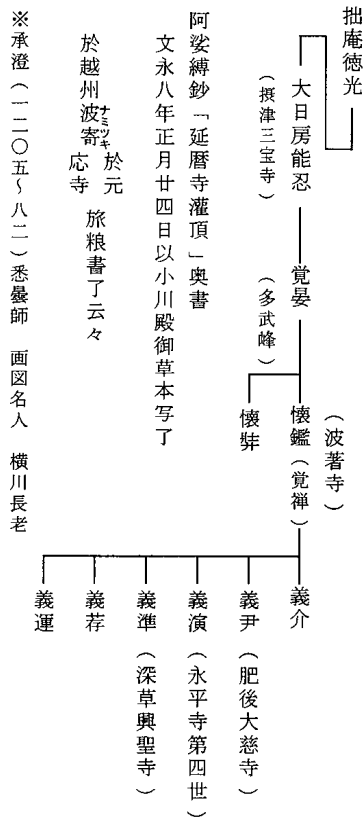
※只時にのぞみ事に触て、興法の為利生の為に諸事を斟酌すべきなり。（正法眼蔵随聞記第一 岩波文庫本 四〇頁）

乾元 元年（一三〇二） 84 大乘寺退院。瑩山大乗寺住持就任。

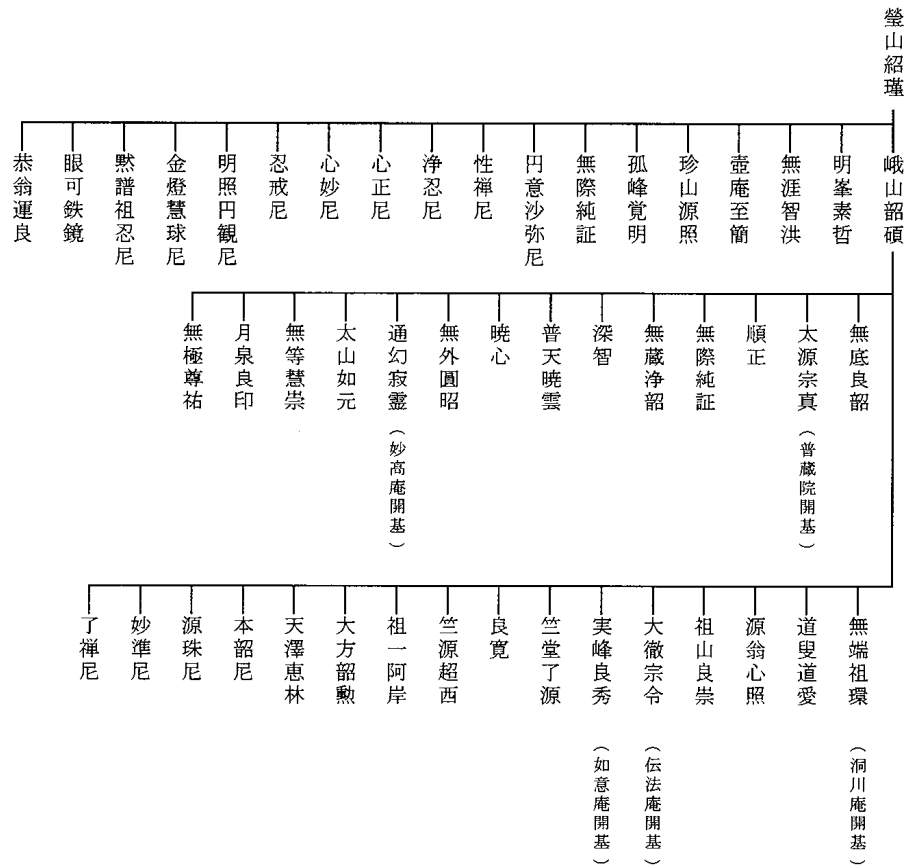
徳治 元年（一三〇六） 88 自賛の頂相を明峰素哲に与える。

延慶 二年（一三〇九） 91 入滅。開山塔（定光院）

VI. 日本達磨宗の系譜



VII. 瑩山・峨山禪師略法系譜



VIII. まとめ

行実

- ※義介について出家。懷犇の末期の弟子。義演に仏祖正伝菩薩戒作法、義介に嗣法うく。
- ※寂円、東山湛照、白雲慧暎、無本覚心に歴参。
- ※城万寺、大乘寺、永光寺、總持寺に歴住すると共に、門弟(四門人六兄弟)の育成。
- ※能登に永光寺、円通院、光孝寺、總持寺、加賀に宝心寺、放生寺、浄住寺建立。
- ※洞谷山尽未来際置文を作成し、輪番住持制の基礎を築き、檀家を重視するよう指示。

思想的背景

- ※道元の正伝の仏法(只管打坐)が基本。
- ※義介の時代に即応した進歩的積極的宗風。
- ※東山湛照・白雲慧暎・無本覚心の公案や密教さらには俗信仰も含む祈禱的要素。

(資料作成について遠藤ゆかり・内藤沙織学芸員の協力を得た)

